経済論叢別冊　調査と研究（京都大学）第22号，2001年10月

京都大学経済学部所蔵の小島勝治旧蔵書*

——幻の「小島勝治文庫」——

櫻　田　忠　衛

I　はじめに
——小島勝治の仕事——

小島勝治の名前が，私たちの前に彗星のごとく現れたのは，1972年７月に未来社から出版された『日本統計文化史序説』という570頁から成る大著によってであった。そして，その刊行の余韻がさめやらぬ1973年１月26日には，NHK教育テレビが教養特集で「幻の統計学者——小島勝治——」を放映した[1)]。

小島勝治については，丸山博らの紹介によって経済統計研究会（現・経済統計学会）を中心に，その存在は一部では知られていたが，全国的にその名を広く知らしめたのは『日本統計文化史序説』の刊行とテレビ放映であった。

小島勝治は，1914（大正３）年10月19日に大阪市で生まれ，1944（昭和19）年７月中支方面で戦病死する。30年に満たない短い生涯であった。小島は，召集されて戦地に駆り出されるまでは大阪府布施市（現在の東大阪市）の産業課統計係の職員として，後には大阪市の財団法人弘済会（社会事業団体）の庶務課統計係の職員として統計実務に従事しながら[2)]，民俗学，統計学，社会事業論の三つの分野での研究を精力的に押し進めた。小島が統計学と社会事業論の分野で残した仕事は，友人であり，研究仲間であった丸山博と松野竹雄の両氏によって『日本統計文化史序説』（未来社，1972年），『統計文化論集』Ⅰ～Ⅳ（未来社，1981年～1985年）の５冊にまとめられて刊行された。統計学，社会事業論の研究は，小島が布施町役場に就職し，1935（昭和10）年11月統計係に配属されてから開始される。統計学関係で最初に公表された論文は「統計と世相の学」で，大阪府統計協会の機関誌『浪華の鏡』に３回にわたって掲載された。小島，21歳のときである。それから1942（昭和17）年４月，召集されて戦地に駆り出されるまでの７年間，若干20歳代の青年が大学の研究室ではなく，一吏員として日常の実務をこなしながら精力的に研究をすすめ，それが５冊の著書として私たちに残されたのである。

小島の研究は，量的な大きさはもちろんのこと，その内容や，問題意識，構想も大きく，質的に高いものであったことが多くの研究者から評価されている[3)]。

＊本稿の執筆に際して，京都大学大学院経済学研究科中野一新教授，今久保幸生教授には，丁寧で有益なコメントをいただいた。記して感謝したい。もちろん，ありうべき誤りはすべて筆者の責任である。

1）これは，その後１月29日に再放映され，２月18日には再々放映された。また，この番組を録音し，文字におこして記録したものに安藤次郎「録音・筆記『幻の統計学者—小島勝治—』」（金沢大学法文学部経済学科統計学研究室『社会統計学論集（Ⅱ）』1974年）がある。

2）拙稿「小島勝治の統計論」『統計学』第32号，1977年。

3）ここでは『日本統計文化史序説』が刊行されて以降のもので小島勝治の仕事への評価を加えたものを中心に掲載する。

大矢真一「解説」『日本統計文化史序説』未来社，1972年。

松野竹雄「解題」『日本統計文化史序説』未来社，1972年。

杉原四郎「小島勝治と『浪華の鏡』」『未来』第73号，1972年（後に杉原四郎『読書紀行』未来社，1975年に収録される）。

吉田光邦「若々しい思考のあと—統計文化史研究に貴重な一里塚—」『読書人』1972年10月23日。

北島正元「日本的数理観念の形成過程—小島勝治『日本統計文化史序説』—」『朝日ジャーナル』1972年11月27日。

藪内武司「書評・小島勝治『日本統計文化史序説』」『統計学』第26号，1973年。↗

II　小島の統計学研究の土台
――研究会組織と文献調査作業――

大学や研究機関に身を置かずに在野に居ながらにしてなお，単なる思い付きやひらめきではなく，当時の統計学界の理論水準を凌駕するほどの研究が可能だったのは，自分の仕事＝統計実務を研究に結びつけることができたことと，彼が積極的に研究会を組織し，その研究会に小島と同じ統計実務家はもちろんのこと，大学や研究機関に籍を置く研究者も多数参加したことである。このことを丸山博は「彼は昭和13（1938）年には大阪の統計実務労働者の自主的な研究組織『統計談話会』を組織し，ついで昭和14（1939）年には，これを統計実務労働者と統計学研究者とが加わる『統計学研究会』へと発展させた。この事実を重視してほしい」[4]と，研究組織者としての小島を紹介しながら，小島との関係は「この研究会に始まる」[5]と回顧している。丸山博は当時大阪帝国大学医学部助手で，他に立命館大学助教授杉栄，大阪府統計協会松野竹雄らがメンバーとして加わっていた。また，彼は民俗学研究においてもそうであったように，統計学研究をすすめるうえでも大学や研究機関に属する研究者との交流を積極的に展開した。彼の自編になる著作目録[6]には，交流した研究者の名前をいくつか見出せる。たとえば，「宗藤圭三先生にあふ，また森喜一，風早八十二，牧哲男，三浦かつみなどと相しる」「日本統計学会に入る，郡菊之助，豊崎稔先生にあふ」[7]と記している。小島は，こうした人たちとの研究上での交流を深めることによって，在野の研究者にありがちな，ひとりよがりの研究姿勢を克服することができたのである。

小島が在野にありながら統計学の分野で業績をあげることができたもうひとつの要因に，古今の文献を広く蒐集し，それらを正確に読み取っていたことがある。

小島は，大阪府統計協会の『浪華の鏡』[8]等に統計学文献や統計書を数多く解題している。その全ては，『統計文化論集　Ⅳ』に「第８部統計書・統計学書の解題と書評」として収録された。松野竹雄は「編者あとがき―解題にかえて―」で「学問研究の基本の一つは，真摯な文献史的研究である。それはまた忍耐と努力を要する文献作業をその出発点とする」[9]として，過去の文献を蒐集し，それらを対象にした文献史的な研究が先ず行われなければならないことを

↘　竹内啓「社会思想としての統計発達史―小島勝治『日本統計文化史序説』書評―」『季刊経済学論集』第39巻第２号，1973年。

橋本勝「小島勝治著『統計文化論集Ⅰ』」『統計学』第44号，1983年。

小林迪夫「『統計文化論集』について―情報収集の先駆的業績の評価―」『厚生の指標』第30巻第10号，1983年。

小沼正「『社会事業統計の研究』（小島勝治『統計文化論集Ⅱ』）」『季刊社会保障研究』第19巻第２号，1983年。

細谷新治「シーボルトのつくった統計表を索めて―日本統計事始の一齣―」『Library and Information Science』No.27,1989年。

小島の研究を継承し，発展させる意図をもって行われた業績もいくつか生み出されている。

細谷新治『明治前期日本経済統計解題書誌：富国強兵篇』一橋大学経済研究所日本統計分析センター，1980年。

橋本勝「統計文化と世論調査」『統計学』第46号，1984年。

小島を日本統計学史のなかに正当に位置付けたものに

藪内武司『日本統計発達史研究』法律文化社，1995年。

竹内啓編集委員代表『統計学辞典』東洋経済新報社，1989年。

がある。特に，『統計学辞典』では，「日本の統計学と統計の歴史」の項で，昭和初期の統計学者としてとりあげられ，「没後30-40年にして近年その業績が明らかとなった小島勝治を逸することはできない」と注目され，頁の半分を費やして小島の業績の紹介にあてている。

4）丸山博『資料小島勝治と「浪華の鏡」』（経済統計研究会第25回全国大会報告附属），1981年，５ページ。

5）同上書，５ページ。

6）佛教大学社会福祉学研究室「資料小島勝治文献目録」『社会学部論叢』第３号，1969年９月。

7）同上，18ページ。

8）小島が主に寄稿した大阪府統計協会の機関誌『浪華の鏡』については，杉原四郎「小島勝治と『浪華の鏡』」『未来』第73号，1972年，松野竹雄・杉原四郎対談「在野の統計学者小島勝治と『浪華の鏡』」（杉原四郎『続日本の経済雑誌』日本経済評論社，1997年），藪内武司「統計雑誌」（杉原四郎編『日本経済雑誌の源流』有斐閣，1990年）に詳しく述べられている。また，丸山博は『資料小島勝治と「浪華の鏡」』を作成して，『浪華の鏡』の全巻の目次と編集後記を復刻した。

9）小島勝治『統計文化論集Ⅳ』未来社，1985年，339ページ。

強調する。そして，小島の「統計学研究における文庫作業，ひいては文献史的研究は，まさに地道な本格的な道程であり，その着実な研究姿勢の足跡」が，『統計文化論集　Ⅲ』の「第6部　統計学研究討論記録—大阪統計談話会共同研究記録—」と『統計文化論集　Ⅳ』の「第8部　統計書・統計学書の解題と書評」に示されていて，これらの作業は十分な評価を得るだろうと述べている[10]。

たしかに，小島が行った統計書の解題のうち，「日本統計稀覯書解題」では万延元年の「万国政表」からはじまって，明治時代に刊行された統計書の主要なものについて的確にとりあげていて，その文献史的関心の広さと基本を確実におさえているのには驚かされる。このことは，「国勢調査之文献解題」にもいえることで，ここでは大正9年に実施された日本で最初の国勢調査だけをとりあげるのではなく，杉亨二の「駿河国沼津・原政表」（明治2年）や「甲斐国現在人別調」（明治15年）などを先駆的文献としてとりあげ，法制定や帝国議会と国勢調査の関係，「臨時台湾戸口調査」（明治41年），「東京市市勢調査概数表」（明治43年）など，国勢調査に至る文献や統計書を調査し，解題を加えていてスケールの大きな国勢調査文献史になっている。また，「日本の統計学書解題」は，日本の統計学においてそれぞれの思潮を代表し，かつ特色のある統計学書の内容を解説したもので，「書評・読書紹介」は，小島が自ら読んで影響を受けたり，読者に紹介したいものをとりあげて評を加えたものである。

経済統計資料研究者の細谷新治氏は，小島の統計資料研究について「構想の雄大さと資料収集の綿密さに驚きました」[11]と評しているが，まさに小島の統計学研究は文献研究，文献収集を基礎にして行われていて，それが土台となって，その上に堅牢に築かれた建造物のような構造をもった研究であったということができる。

10）同上書，339ページ。
11）細谷，前掲論文，6ページ。

III　京都大学経済学部所蔵の小島勝治旧蔵書

1　幻の「小島勝治文庫」

京都大学経済学部図書室には，小島勝治が生前，統計学研究のために蒐集し，蔵書としていた図書が所蔵されている。一般的には，個人の蔵書が図書館（室）に受け入れられた場合は，文庫としてその個人名が冠されて一定の場所にまとめて配架され，運用される。京都大学経済学部にはそうしたものとしてマイヤー文庫，ビュッヒャー文庫，上野文庫，財部文庫，河上文庫，石川文庫等がある。しかし，小島勝治の旧蔵書は「小島文庫」としてはまとめられずに一般図書の中に組み入れられ，その運用も一般図書と全く同じ扱いで「文庫」の形はとっていない。そのこともあって，生前書き上げられた統計学研究の成果が公刊され，テレビもその生涯をとりあげて「幻の統計学者」として，あるいは在野の統計学研究者として世に知れ渡ることになったが，京都大学経済学部図書室に残された彼の旧蔵書については注目されることはなかった。

小島のオーソドックスな研究方法は，先述したように文献蒐集と文献調査を丹念に行うことによって確立していた。そうであれば，小島の研究姿勢の根幹をなしている文献蒐集や文献調査に関心がもたれて，小島がどのように文献を入手し，どのように読んでいたかが深く検討されなければならなかった。小島研究の基礎となるべきこの点に関しての研究が遅れていたり，これまで見落とされてきたのは，京都大学経済学部図書室に埋もれてしまった小島の旧蔵書の存在を明らかにしえなかったことに，その原因の一端があるのかもしれない。小島が残した統計学研究の成果を再評価し，小島研究を活性化させて，統計学と統計実務の関係を社会的に位置付けることは，現在のようにコンピュータや情報技術の発展によって大量の統計データが容易に取り込めるようになって，その内容を吟味しない安易とも思える統計データ利用が増大している今こそ必要なのではないだろうか。

2　小島旧蔵書をはじめとする小島資料の行方

小島が蒐集した民俗学や歴史学，統計学の書籍や資料類，また彼が書き残した未発表の原稿類やメモ，日記類はその散逸をおそれて，丸山博教授の要請で京都大学経済学部の大橋隆憲教授のもとに引き取られた。大橋教授は，引き取った小島資料のその後の措置について「小島勝治氏文献は，京大所蔵図書と重複せぬ分は，京大経済学部図書室に収納してもらいました。重複分は私の所で買い取り一応の支払いを終りました。日記類はまだ未整理で研究室にほこりをかぶって居ります。本棚一つ分の諸資料がまだ未整理です……。民俗関係資料は，私自身関心をもっているので，是非保持していたかったが，支払いの必要上，古本屋に渡し，そこから支払いを完了してもらいました。」と丸山教授へ報告している[12]。

大橋教授のこの報告からわかるように，小島の旧蔵書のうち統計学に関するもので京都大学経済学部の図書室が所蔵していないものは，そこに受け入れられ，重複したものは大橋教授が個人で引き受けている。

民俗学関係のものは，支払いのために古本屋に渡されたとあるが，これは小島の蔵書や日記，メモ，原稿類を提供してくれた遺族への支払いのことであろう。古本屋へ売られたのだからこれは個人があるいはどこかの機関がまとめて買い入れていれば別であるが，散逸してしまった可能性が大きい。

日記類はこの時点では大橋研究室でほこりをかぶっていたが，その後，丸山教授のもとへ移された。いつの時点で移されたかは不明であるが，私は丸山教授が生前の頃，先生宅でそれらを直接見せていただいたことがある。また，教授自身，その日記について実際にそれを示しながらインタビューに応えている記録が残されている[13]。

「本棚一つ分の諸資料」は，佛教大学の上田千秋教授の研究室へ引き取られた。上田教授は，佛教大学社会福祉学研究室編「資料　小島勝治文献目録」（『佛教大学社会学部論叢』第3号，1969年9月）として，小島本人自編の目録を公にしたが，これは上田教授が「彼が遺した『本棚一つ分』ほどのメモや日記類や，論文の別刷の束の中から発見した」[14]もので，京都大学の大橋教授の研究室にあった「本棚一つ分の諸資料」は，いつの時点かは不明であるが，佛教大学の上田教授の研究室に移されたことを明示している。その後，上田教授室に保管されていた「本棚一つ分の諸資料」の一部は，京都大学経済学部調査資料室に移され，その中にあった未発表の遺稿「階級社会の統計学」が発見され，同室の細川元雄氏によって解題が付されて紹介された[15]。

こうして，小島の旧蔵書や彼が書き残した未発表原稿やメモ，日記類は時間の経過とともにその保管場所を変えていった。いま，私にわかるのは，大橋教授が京都大学経済学部図書室に受け入れた統計学関係の旧蔵書と，上田千秋教授の研究室より京都大学経済学部調査資料室へ移された「本棚一つ分の諸資料」の一部のみである。「本棚一つ分の諸資料」の内容の紹介については次機会に譲ることにして，今回は京都大学経済学部図書室に受け入れられた小島旧蔵書の全容について紹介することとする。

3　小島旧蔵書が京都大学経済学部図書室へ受け入れられた経過

すでに述べたように，大阪大学医学部丸山博教授は，小島勝治の蔵書や未発表原稿，メモ，日記類の散逸をおそれて，京都大学経済学部大橋隆憲教授に一切をひきとり，整理してもらうことを依頼した。それを受けて大橋は，小島の蔵書のうち統計学に関する文献で，かつ京都大学経済学部図書室に所蔵されていないものに限って受け入れることにして，小島の遺族から

12）丸山博「小島勝治論」『統計学』第11号，1963年，75ページ。

13）『日本における統計学の発展』（昭和55，56，57年度文部省科学研究費総合（A））第29巻：話し手丸山博，聞き手前田正久；1980年9月21，22日，丸山宅。

14）佛教大学社会福祉学研究室，前掲論文，20ページ。

15）小島勝治「階級社会の統計学」『統計学』第32号，1977年（『統計文化論集Ⅰ』に収録された）。

買い取った。

こうして京都大学経済学部図書室に受け入れられた小島の旧蔵書の目録を作成したが，先述したように，小島の旧蔵書はその名を冠して文庫として別置はされずに一般図書として組み入れられてしまったために，書庫の中からあるいはカード目録によってそれを探し出すことは不可能であった。そのために，これらの内容を明らかにするためにはいくつかの作業が必要であった。京都大学経済学部図書室には，「図書受け入れ簿」があって，受け入れられた購入図書，寄贈図書は全てこの帳簿に記帳されて，京都大学の物品，つまり国有財産として登録され，受け入れ番号が附属図書館より付与される。私はこの「図書受け入れ簿」のなかに，小島の遺族，小島嘉彦氏を販売人として昭和34年3月31日の日付で377冊の図書が記帳されているのを発見した。これが，小島の旧蔵書であることを確信し，それらの書名を書き写して目録カードを検索し，現物にあたって目録を作成した。

377冊という冊数は，戦前刊行された日本の統計学文献の量からするならば多くはないが，しかしこれは，京都大学経済学部図書室にすでに所蔵されているものは抜いて，戦前の京都帝国大学経済学部が蒐集してもなお抜け落ちていたものに限ったのであって，質的には貴重なものが多いことになる。しかも，これらは在野にあった統計実務に従事する一人の青年が蒐集した文献なのであるからなお驚かされる。

図書館（室）が個人の蔵書を受け入れる場合には，その全てを一括して収納するのが一般的である。そうすることによって蔵書の面から所蔵者の関心や学問形成過程，交際範囲や人的関係，そして当時の学術・文化的状況まで知ることが可能になる。しかし，小島の場合には全ての蔵書が受け入れられることにはならなかった。これはおそらく，当時の京都大学経済学部の教官協議会や図書委員会で検討された結果によるのであろう。在野にあった統計実務家の，それも戦前の雑誌には論稿を公表してその業績は経済統計研究会などの一部では大いに認められてはいたものの，その時点で著書は刊行されておらず，一般的にはまだ認められていなかった研究者の旧蔵書を受け入れ，文庫としてその名前を冠して運用することには多くの抵抗があったことは想像に難くない。大橋は後に，そのあたりのことを明確にではないが，自分の蔵書を将来どうするかを問われて「大体本は，花園大学にみんなあげちゃおうと思っているんだ。……大したものはないけれども，それでも一応，小島勝治の文庫もある。京大へ入れるというのはなかなかめんどうだ。何か議論があって。だから，全部花園に入れちゃって……」[16]と述べて，京都大学在任中に小島の旧蔵書を一括して京都大学経済学部図書室に入れようとしたが，抵抗があってうまくいかなかったことをほのめかしている。そして，その苦い経験から自分の蔵書は京都大学には入れないとの決意を語っている。

しかしながらそうはいっても，小島の旧蔵書が一部であろうとも京都大学経済学部図書室に残された意義は大きい。京都大学経済学部の統計学講座は「社会統計学の方向をとるか，数理統計学の方向をとるかの岐路に立っていたが，財部の統計学講座担任教授就任により社会統計学の方向をとることになった」[17]といわれるように，経済学部創立時の財部静治教授にはじまり，その後を蜷川虎三教授が，戦後は大橋隆憲教授が継承した日本でも有数の社会統計学を標榜した講座であった。大橋はその著書『日本の統計学』において「この本にとりあげた日本の統計学者は，そのほとんどが官僚的統計教育機構の頂点部分に立った，いわば特権官僚統計学者である。しかし，彼等は，その官僚機構の中にあっても，学問を通して権力や金力に結びつく方向を否定して生きた人びとである。日本の社会経済統計学が，こうした人びとによって築きあげられてきたことを，われわれは誇りに思

16）『日本における統計学の発展』（昭和55，56，57年度文部省科学研究費総合（A））第51巻：話し手大橋隆憲，聞き手野村良樹，吉田忠，野沢正徳他；1982年9月23日，大橋宅，83ページ。

17）大橋隆憲『日本の統計学』法律文化社，1965年，62ページ。

う」[18]として，９人の社会統計学者をとりあげて，その人と学説について論及した。大橋は，その中に，財部，蜷川をくみいれて，その学風，研究方法について言及し，２人を「権力と金力に迎合せず，真実を究め，真実を語り，真実を教える，その自由を守らんとして戦ってきた精神を」[19]体現した統計学者として位置付けた。そうした伝統をもった統計学講座を引き継いだ大橋であればこそ，在野にあって，戦時下という厳しい状況の中で，権力におもねることなく，「悪魔の数字」を「国民大衆の数字」にするためにその生涯をささげた小島の研究業績に対して強い関心を持ったのは当然のことであった。

しかし，大橋は小島について，『日本の統計学』の「まえがき」で「この本を故・小倉金之助先生にみせるなら先生はこういうにちがいない。『なんだこの本は，特権官僚学者どもの御用統計学の系譜を示しているにすぎないではないか。国民大衆の中で，国民大衆と共に，第一線で仕事をした民間統計家，たとえば小島勝治などの系譜がぬけおちているではないか』と」[20]と記しはしたが，直接その仕事について言及することはなかった。

小島への評価がまだ定まっていない困難な中で，その旧蔵書が京都大学経済学部図書室に受け入れられたことは，大橋の先見性と小島への強い関心を示すものであり，並々ならぬ熱意を感じさせる。また，大橋が京都大学を退官後，日本福祉大学，花園大学へ移っての晩年は，社会福祉論への関心を強めていたことも，小島との共通性がみえて興味深い。

小島の旧蔵書のうちの一部ではあるが，それらが京都大学経済学部図書室に受け入れられたことは，大橋の業績として評価されなければならないが，同時に京都大学経済学部の統計学講座の社会科学方法論としての統計学の立場を堅持してきた伝統が，その要因になっていたことも見逃されてはならないだろう。

18）同上書，まえがき。
19）同上書，まえがき。
20）同上書，まえがき。

IV　小島の統計学文献蒐集

小島の研究は，日本古代史の研究から始まって民俗学，統計学，そして社会事業論にまで拡げられた。小島は時々の研究関心に従って，文献蒐集を重視して行い，大量の文献を購入している。それらが蔵書となって残されたが，ここでは統計学の分野に限ってその蒐集の様子について述べてみたい。

小島の自編になる「文献目録」によると，彼は1935（昭和10）年４月布施町役場に入り，いくつかの係を転々とさせられて11月に統計係に落ち着くことになる。1936（昭和11）年３月，大阪府統計協会の機関誌『浪華の鏡』にはじめての統計に関する論稿「統計と世相の学（１）」を掲載し，1937（昭和12）年５月に「統計学専攻をおもひた」ち，1938（昭和13）年２月には「統計学専攻，ことに統計史を主として資料蒐集に着手する」とある。小島25歳のときであった。

資料蒐集は，小島が召集されて中国戦線へ駆り出される1942（昭和17）年４月３日までのわずか４年余りの間であった。この４年という短い期間に，小島は日本の統計学史や統計調査史のうえで重要な文献はほとんど検討し，当時，公刊された統計学，統計書についても検討を加え，『浪華の鏡』に紹介した。その内容については第Ⅱ節でみた通りである。

ここでは，青年学徒小島が，日常生活の中でどのように文献蒐集への情熱を発露していたのかを，彼自身の言葉で語られているところを抜き出して描いてみたい。

昭和13年（25歳）の２月

「統計学専攻，ことに統計史を主として資料蒐集に着手する。」（Ⅱ－iv）[21]

として，本格的な統計学の資料蒐集が開始された。

21）ここでの引用は，『統計文化論集』ⅡとⅣの丸山博の「序にかえて―編者まえがき―」からのものである。（　）内は引用巻数とページ数を示している。たとえば，『統計文化論集』Ⅱの「序にかえて―編者まえがき―」のivページは（Ⅱ－iv）とした。以下同様である。

その年の12月17日には

「甲斐国人別調が15円もした。12月１日松阪屋の古書展で買ふ。11月よりこちらへ１月に約60円を古書にすてた，うれしいことだが。」（Ⅱ－ｘ）

と記している。

昭和14年（26歳）の正月には，昭和13年２月に書いたことを裏付けるように

「昨年は統計古書あさりに熱中した。はじまりは２月頃であったと思ふ」（Ⅱ－xi）

と記している。

小島の楽しみは，古本屋めぐりでそれは彼の日常生活そのものになっていて，とくに，友人と一緒であったり，珍しいものが安く買えたときは喜びがいく倍にも増大することを素直に表現している。

日常生活の一部になっている様子は，昭和16年（28歳）の１月３日に

「朝久しぶりで布施広小路を散歩する。のんびりとあるいて古雑誌を二，三買う」（Ⅳ－vii）

とあったり，友人との古本屋めぐりや，本をめぐる会話はしょっちゅうで，たとえば

「１月４日　午後本庄，松野と古本屋をまわる。」（Ⅳ－vii）

「１月８日　ひる丸山博をとい談話。新刊書などのはなし。夕方丸善に新刊をみる。」（Ⅳ－viii）

「１月11日　雨，午後松野宅に行って談話。統計古書蒐集のおもいでばなしに時を過す。」（Ⅳ－ix）

「２月22日　松野と歩き古雑誌少々を買う。」（Ⅳ－ｘ）

といった具合で，文献をあさる様子が次々と記されていていとまがない。また，掘り出しものを見つけたときの喜びを，

「坪谷善四郎の統計学要論場末にて安く見つける。まだ時折珍書が手に入るものなり……。古書さがしの興味を覚ゆ。掘出しあるが為也。」（Ⅳ－12）

「今日帝塚山より住吉辺の古本屋をまわりて相当おもしろき本若干見つけ来たり。書よむゆとりもなけれどユ快なりき。」（Ⅳ－12）

と素直に表現している。

こうした文献あさりを続けながら，小島は統計学に関していえば，統計学専攻を心に決め，統計史を中心とした資料蒐集をはじめた1938（昭和13）年２月，25歳から戦争に駆り出されて文献蒐集が不可能になる1942（昭和17）年４月，29歳までの４年の間に量的にも質的にも高い文献の蒐集に成功した。量的には，大橋隆憲教授の研究室に持ち込まれたものだけで，民俗学関係のものも含まれるが，1524冊という膨大な数になっている[22]。これが，元々の小島の旧蔵書であるが，これだけのものを調査し，蒐集したことについてはそのエネルギーと能力の大きさに驚嘆するのであるが，それにも増して我々を驚愕させることに，小島がその蔵書を構成するために使用した金額がある。彼は給料のほとんどをこのために費やしていた。

ここにそれを具体的に示してくれる興味深いメモがある。現在は，京都大学経済学部調査資料室に移された「『本棚一つ分の諸資料』の一部」の中にあったもので，「昭和14年中の或る青年学徒の生計」と題された家計簿である。「或る青年学徒」とあるが，これは明らかに小島自身のことであろう。勤労収入，借金，其他（補助）から成る「収入」と，実支出，貯金，貸金または返金から成る「支出」に分けて，１月から12月までを月ごとにそれぞれ金額を記入して１年間分を合計している。さらに，翌年の１月と２月の金額をも記入している。

その表の下には，実支出内訳があって，外出食事，煙草，喫茶，交通，書籍，交際・娯楽，負担金，人への贈物，其他に分けられて，それぞれについて１月から12月までが記入され，１年間の合計，月平均，そしてこれも翌年の１月，２月が記入されている。このメモは，国民生活が規制の方向に進んでいく戦時下の中で，ひとりの青年がどのくらいの収入を得て，どんなこ

22）大橋隆憲教授のもとに持ち込まれた資料，文献については，機会を改めて紹介したい。

とに支出をして生活していたのか，興味をそそられるが，ここでは小島が文献を蒐集するためにどのくらいの金額を支出していたのかを知ることに限定する。

昭和14年の実支出合計は835.82円で，書籍に支出した金額は360.35円となっている。月平均にすると，実支出は70.66円，書籍代は30.03円で，これは実支出のうちの42.5％を占めることになる。なんと生計費の半分近くが文献蒐集の費用に充てられていたのである。独身の青年が多く費やすであろう煙草，喫茶，交際・娯楽費は合せても月平均11.24円で，実支出の15.9％を占めるにすぎない。これだけをみても小島の文献蒐集のために支出した金額は，桁外れに大きいことがわかる。この一枚のメモから，小島が毎日の生活を研究中心において，働いて得た収入のほとんどを研究のために費やしていた様子が窺い知れるのである。

こうして青春のすべてを統計学の研究に捧げながら，その半ばにして惜しくも帝国主義戦争の犠牲になって逝ってしまった在野の一青年学徒の旧蔵書が，京都大学経済学部に所蔵されてきたことの意義は大きい。その存在は，これまで明らかにされてこなかったが，その概要を今明らかにすることによって，小島勝治に関する研究がこれまで以上に深められ，そして何よりも小島自身がめざして完成させられなかった，「日本統計文化史」の仕事を引き継いで，完成させる事業に寄与できるならば幸いである。